

Title	日本語学習過程におけるm-learningの現状、受容と利用プロセスについて
Author(s)	張, 文超
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72216
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (張文超)	
論文題名	日本語学習過程におけるm-learningの現状、受容と利用プロセスについて
<p>論文内容の要旨</p> <p>学習観が行動主義から認知主義さらに構成主義に変化するにつれて、学習者の主体性が強調されるようになった。これまでの日本語教育を含む言語教育に関する研究では、どのように教えるかということに関心が集まり、学習者がどのように学んでいるかについてあまり探求されなかった。特に、教室外というインフォーマルな環境における学習者の学習の実態について不明な点が多い。また、最近、情報通信技術を代表とするテクノロジーが日進月歩に進化し、学校や教室などフォーマルな学習環境は学習者が知識を得る唯一な環境ではなくなり、学習者が情報通信技術を駆使し、フォーマルな学習環境より多様多彩な学習リソースを入手し、学ぶことができる。実際に多くの学習者はすでに教室外で電子的な機械とインターネットを利用して、学習している。しかし、電子的な機械を利用した学習の手段であるという意味の「e-learning」とその新しい形態の「m-learning」についての研究は、どのように教えるか(education)にフォーカスし、どのように学ぶか(learning)についてあまり探求されてこなかった。学習者が多様化になり、学習者を取り巻く環境も著しく変化するため、これからの研究は学習者中心のアプローチにシフトするだろう。</p> <p>本論文は日本語学習に関する研究の中、とりわけ教室外というインフォーマルな学習環境におけるテクノロジーを利用した日本語学習に注目した。また、近年、スマートフォンが普及し、e-learningがm-learningへシフトしつつある。この背景を考慮し、本論文では、教室外におけるスマートフォンによる日本語のm-learningに焦点を絞った。本論文の目的は、中国人日本語学習者を対象として、教室外のm-learningの現状、受容、利用プロセスを調査することを通して、学習者はどのようなプロセスで日本語のm-learningを行うか(学習アプリの利用に限定する)など学習者の学びの実態を明らかにすることである。</p> <p>本論文は全部で9つの章から構成される。第1章では筆者がこの研究にたどりついた経緯と本論文の構成について説明する。筆者は博士前期課程では教科書、コーパス、日中同形語の研究をした。博士後期課程では中国人向けの教科書における日中同形語の問題をe-learningで解決しようと計画していた。つまり、もともと筆者の関心もどのように情報通信技術を利用して教育上の問題を改善するかに向いていた。しかしながら、研究が進むにつれ、e-learningを教育の手段として教育上の問題を改善するより、学習者がどのように情報通信技術を利用して学習しているかを研究する必要があるのではないかと自覚し、それについての研究をするようになった。</p> <p>第2章では、「学習観の変化」、「学習者への視点の転換」、「中国における日本語教育の現状と課題」、「中国におけるインターネットの事情」の四つの節に分けて、本論文の研究背景を述べる。20世紀に学習観は、行動主義から認知主義、さらに構成主義へ変化してきた。学習という概念も行動主義的な学習観と認知主義的な学習観における学習者の個人の中に閉ざされた学習から、構成主義的な学習観における社会に開かれる学習へと広がり、学習における学習の主体性も強調されるようになった。日本語教育においても、学習者数の増加や学習目的の多様化などを背景として、教育側から学習側に関心が集まってきた。また、日本語学習者数が世界一である中国における日本語教育は、「黎明期・揺籃期」、「復興期・確立期」、「成長期・成熟期」を経て、2011年から「転換期」を迎えたと言われている。「転換期」に入った中国の日本語教育の課題の一つは、教育現場で学習者の多様化にどのように対応するかであると言える。さらに、中国では最近インターネットが急速に普及し、若者の間ではスマートフォンなどの携帯端末からのインターネットの接続がメインになっているという背景がある。</p> <p>第3章では、「学習科学」、「教室外のインフォーマルな日本語学習」、「学習リソース」、「m-learning」、「構成主義と混合研究法」の五つの節に分けて、本論文の研究スタンスと主要な概念について概説する。「教育」と「学習」は関わりがあるものの、それぞれ別物である。「教育」の行動を行う主体は教える人、つまり教育者であるのに対し、「学習」の行動を行う主体は学ぶ人、つまり学習者である。本論文は「学習」を扱い、学習科学の視点に基づくものである。また、研究する学習環境は、教室内のフォーマルな学習環境ではなく、教室外のインフォーマルな学習環境である。</p>	

学習リソースについて、本論文では物的リソースと人的リソース両方を含むものとする。m-learningとはインターネット技術と無線端末（例えば、ノートパソコン、タブレット、携帯）を利用し、任意の時間と場所で学習できることを実現させる手段であるが、本論文はスマートフォンによるm-learningに限定する。研究方法について、本論文では構成構造主義に基づき、混合研究法をとった。

第4章では、「教室外の日本語学習におけるICTの利用」、「技術受容の理論的基礎」、「M-GTAについて」の三つの節で、本論文と関連する先行研究を概観し、次いで「本研究の位置付けと目的」について述べる。本論文は、中国人日本語学習者を対象として、教室外のm-learningの現状、受容、利用プロセスを調査することを通して、学習者はどのようなプロセスで日本語のm-learningを行うか（学習アプリの利用に限定する）、その過程でどのような要素がかかわるかなど学習者の学びの実態を明らかにしたい。

第5章では、本論文の研究の構成と各調査の目的と研究法について概説する。本論文では三つの調査が実施された。調査①と調査②では、アンケートを通して、量的データが収集された。調査①の目的は、中国人日本語学習者が教室外で行うm-learningの現状を把握するためである。調査②の目的は、技術受容の理論を参考にして、重回帰分析という統計方法を利用して、どのような要素が日本語学習者のm-learningの利用に影響するかを明らかにすることである。しかし、調査①と調査②は、量的研究であるため日本語学習者はどのようにm-learningを開始し、どのように継続し、その間にどのような問題に直面するか、最後にどのように終了するかなど一連の動的なプロセスについて調査できないという限界がある。そのため、調査③では、インタビューを実施し、質的分析法のM-GTAを利用して、日本語学習者が教室外でアプリを利用して学習するプロセスを解明する。

第6章では、本論文の調査①の結果について報告する。調査①では、アンケートを通して、中国人日本語学習者の教室外のm-learningの現状を調査した。その結果に基づいて、m-learningのハードウェア、行動、利用目的、利用時間、周囲からの推薦、学習リソースの数量とクォリティー、学習リソースの形式、特徴、利用を制限する要因、ニーズ、態度の11個の面から中国人日本語学習者の教室外のm-learningの現状を考察した。

第7章では、本論文の調査②の結果について報告する。調査②は、技術受容に関する理論を理論的基礎として、アンケート調査を行ない、仮説を検証するとともに、教室外の日本語学習者のm-learningに影響する要因を分析した。その結果、効果期待（PE）、娯楽性認知（PP）、社会的影響（SI）、努力期待（EE）、自己効力感（SE）はm-learningの行動意思に影響を及ぼす要因であることが明らかになった。

第8章では、まず中国人日本語学習者が多く利用している日本語の学習アプリを概観し、調査③の結果について報告する。調査③は調査①と調査②と異なり、質的研究法で行なった。調査③では調査①と調査②の結果を参考にしながら、日本語の学習アプリを利用した行動に注目し、インタビューガイドラインを作成し、M-GTAという質的分析法を用いて、その一連のプロセスを考察した。最終的に、インタビューの文字データから合計24個の概念、9個のサブカテゴリーと4個のコアカテゴリーを抽出した。分析の結果に基づいて、調査③では、学習アプリの利用プロセスについて、【利用前】、【利用中】、【利用後】の3段階と、以下の4ステップがあると仮定した。学習アプリの利用は【利用前】から【利用中】に変化し（ステップ①）、その後【利用後】に変化する（ステップ②）。さらに、学習アプリの利用が終わった後、いままでの経験が学習者の次の利用に影響し、自分の次の学習アプリの利用の【以前の利用経験】のベースになることもあれば（ステップ③）、学習者が推薦者となり、他の学習者が学習アプリを利用し始めるきっかけになることもある（ステップ④）。この一連のプロセスの背景には、【学習者の認識と環境】がある。

第9章では、本論文の内容を振り返り、三つの調査で得られた知見と今後の課題について述べる。いままでの日本語教育が研究される主な対象は学習者が教育を受けている間であるため、その教育が始まる前という時期が死角として日本語教育の視野から外された。しかし、本論文では、正式な日本語の授業に先立って、学習アプリをダウンロードして学習した学習者がいることが判明した。また、学習者が日本語の学習アプリを知るきっかけの一つとして、先輩、ネット上の新入生のコミュニティーのメンバーからの勧めがあることがわかった。正式な日本語の授業の期間中における日本語教師の働きかけはもちろん重要であるが、その授業が開始する前に、先輩、ネット上の日本語学習者のコミュニティーを通して間接的に日本語学習者に働きかけることも重要であることが示唆された。

しかし、教室外という複雑な学習環境におけるm-learningの学びの実態は決して三つの調査で全て追究できたとは言えない。今後、教室外のm-learningは、学習者にどのような学習効果をもたらし、学習者の日本語の学習にどのような影響を与えたかを解明することが必要である。また、どのように教室外のm-learningを教室内の内容と連動させるかを検討する必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (張 文 超)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 岩根 久
	副 査	教 授 岩居 弘樹
	副 査	准教授 難波 康治

論文審査の結果の要旨

張文超氏の博士論文『日本語学習過程における m-learning の現状、受容と利用プロセスについて』は、現代の中国において、m-learning すなわち、モバイル機器を用いた日本語学習がどのようになされているかを、アンケートに基づく量的な分析、またインタビューデータに基づく質的な分析を通して、解明しようとしたものである。

本論文は、日本語がいかにかに教えられているか、ではなく、学習者によっていかに学習されているかに焦点をあてる。その背景として張氏が注目するのは、近年若者の間で広く利用されているスマートフォンである。張氏は、情報通信技術が発展を遂げるなか、学校や教室などフォーマルな学習環境のみではなく、学習者自身が情報通信技術を利用し、学校や教室外での、いわばインフォーマルな学習環境のなかで多様多彩な学習リソースを入手し、学んでいる現状を指摘する。また、これまで「e-learning」についての研究は、情報通信技術を用いてどのように学習するかよりも、どのように教えるかに焦点があてられてきたとし、学習者の視点に立った研究の必要性を訴える。

このような観点から、本論文は、中国人日本語学習者を対象として、教室外の m-learning の現状、受容、利用プロセスを調査することを通して、学習者がどのようなプロセスで日本語の m-learning を行っているか、という学習者の学びの実態を明らかにすることで、今後の学習者の視点に立った研究に貢献し、また、教育への新たな知見をもたらすことを目的としている。

本論文は9章で構成されており、前半の第1～4章、後半の第5章～8章、および論文の総括と今後の展望を述べる第9章から成る。第1章では本研究に取り組んだ契機、第2章では本研究を行う背景について、第3章では、本論文の研究スタンスと主要な概念について、第4章では本論文と関係する先行研究と本研究の位置づけが、それぞれ論じられ、後半の章で扱う調査・分析の理論的なバックグラウンドをなしている。第5章では、第6, 7, 8章で扱う調査について、その目的と研究方法についての概略が述べられている。第6章では、中国人日本学習者が教室外で行う m-learning の現状を把握するためのアンケート調査と、その結果得られた集計データ、すなわち利用目的、利用時間、学習リソースなどの11のデータを基に、中国人日本語学習者の教室外の m-learning の現状が考察されている。第7章では、技術受容の理論を参考に、アンケートデータに対して重回帰分析を行うことにより、どのような要素が日本語学習者の m-learning の利用に影響するかを明らかにしている。第8章では、第6, 7章の量的調査を補完するものとして、多くの初学者に使用される、ある一つの日本語学習アプリを対象としたインタビュー調査が行われ、質的分析法 M-GTA を用いて、日本語学習者が教室外でアプリを利用して学習するプロセスが解明されている。分析を通して、学習アプリ利用の契機が、教室での学習開始前に形成されている仲間や先輩らのネットコミュニティの影響を受けていることが明らかになり、そのようなコミュニティを通して間接的に日本語学習者に働きかけることが重要であると示唆されている。

本論文は中国における m-learning 受容の実態の一側面を初めて明らかにした画期的な論文である。また、しつかりとした構成のもと、明快な論述で展開されており、審査員一同高く評価している。ただ、m-learning の受容のみならず、学習そのものの実態が明らかになることが期待されるが、このことは、本論文の価値を損なうものではなく、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものであると認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。